

★今週の聖句

「主よ、しかし、食卓の下の小犬も、子供のパン屑はいただきます。」  
マルコによる福音書7章28節

★ねらい

歴史的な背景をこまごま話し出すと、子どもたちを困惑させてしまうこともあります(大人でも)。食卓からパンが落ちるほどに、神の恵みは、溢れるというところに絞って考えたらと思いました。

★説教作成のヒント

聖書の言葉は、無駄なく書かれているところがあると思います。その意味を汲み取りつつ、子どもたちに伝わりやすく、肉付けをして語ることは、ひとつポイントであろうと思います。今回のテキストにおける女性の言葉、イエスさまの言葉、意味が変わるほどになってはいけませんが、生き生きとした場面を思い描いてもらうためにも、せりふに肉付けをすることに工夫をするのは良いと思います。

★豆知識

ユダヤ人は、異邦人のことを「犬」と呼ぶことがあったようです。わたしたちも、「権力の犬」といったように、悪い意味で使うことがありますね。ここでは、「小犬」と訳されているように、「犬」という響きとはちょっと違う単語が用いられています。野良犬ではなく、飼い犬のイメージ。イエスさまは、この時、まったく侮蔑的な言い方はなされなかったと思われます。

★説教

「わたしはいつもあなたと共にいる。」という言葉が聴いたこと、あるでしょうか。わたしはいつもあなたと共にいる。」これは、イエスさまが、わたしたちに下さったお約束です。わたしたちが、どこにいても、だれといても、何をしても、イエスさまは、あなたのそばにおられます。その約束が、「わたしはいつもあなたと共にいる」というお言葉です。日本にいる私たちだけではありません。中国にいる人も、アフリカにいる人も、ドイツにいる人も、…。世界中どこにいても、「わたしはいつもあなたと共にいる」と、イエスさまは私たち皆にお約束してくださいました。そのことを思い出すと、先生は、とっても安心します。一人ぼっちじゃないんだ、いつもイエスさまと一緒にいてくださるんだ、と思うと、先生は、いつも安心できます。みんなも、色々な時に、ぜひ思い出して下さい。

さて、でも、昔は違いました。イエスさまは、今から2015年前に、ユダヤの人々の暮らすところでお生まれになって、ユダヤの人々と一緒に生きておられました。その時は、みんなと一緒にいてくれるイエスさまではなくて、「ユダヤの人々と共にいる」イエスさまでした。父なる神さまが、そのようにして、初めは、ユダヤの人々のところに行かれることをお望みだったからです。

さて、そんなイエスさまのところに、ユダヤの人ではなく、ひとりのギリシヤ人の女の人がやってきました。おうちで娘さんが病気で苦しんでいたのが、イエスさまになおしてほしいと願ったからです。この人は、ユダヤ人ではありませんでしたが、イエスさまのおうさを聴いて、やってきました。こんなとき、ユダヤの人ならば、すぐに病気をいやしてくださるイエスさまでした。けれども、天の神さまから、「今は、ユダヤの人々のために働きなさい」と言われているので、「まず子供たちに食べさせないといけな。テーブルの下の小犬にはあげられない」とおっしゃってこの時はお断りになりました。それは、「わたしは今は、一緒に暮らしているユダヤの人々のために働いているのです。」ということだったようです。

それにしても、同じ人間なのに、「小犬」なんて言われて、女の人は、どんな気持ちになったのでしょうか。もしもわたしだったら、「じゃあ、いい。もう頼みません」と怒ってしまうかな、と思います。でも、このギリシ

ヤ人の女性は、あきらめませんでした。彼女は、イエスさまは、本当はユダヤの人々のためだけの神さまではない、みんなをお救いになるお方だ、と信じていたようです。神さまのお恵みは、ユダヤの人々のためだけ、なんて、そんな小さなものではない。それは世界中の人々にあふれるほどだと信じていました。だから、「そうですね、イエスさま。あなたがテーブルでパンを子どもたちにお与えになるのは大事なことです。でも、あなたがお与えになるパンは、テーブルにのりきれないほどですから、そこから落ちてくることでしょう。そうしたら、テーブルの下にいる小犬もそのパンをいただくことになるでしょう」と答えたのです。

こんなに深く、深く、神さまの愛を信じている姿をご覧になって、イエスさまは、「あなたは、ほんとうに、ほんとうに、心から神さまの恵みを信じているのですね。わかりました。おうちに帰って御覧なさい。もうお嬢さんは、治っていますよ」とおっしゃいました。女の人がおうちに帰ってみると、娘さんは、本当に元気になっていました。

テーブルからあふれてこぼれるほどのパン。それは、天からこぼれるほどの恵み。わたしたちがどこにいても、いつも一緒にいてくださるイエスさまの恵みのことです。あのギリシヤ人の女の人のように、私たちも、イエスさまのこと、心から信じたいものです。

#### ★分級への展開

##### ○さんびしよう

\*讃美歌は”こどもさんびか”(日キ版)より

56番「かみよこのひ」

改訂版31番「主よ、おいでください」

##### ○はなしてみよう

この女性は、結果的には、娘さんの病気をいやされるといふ答えをいただきましたから、ある意味で、ハッピーエンドです。でも、わたしたちがどんなに祈っても、願いが叶わないこともあります。「祈る」ということについて語り合い、また実践してみたい。

##### ○やってみよう

机の上に人数分のお皿を置きパンを少しずつ切って入れてみんなで食べてみましょう。

次に机の下に紙を敷いてパンを小さくちぎってばらばらと置き机の下に入ってパンを食べてみましょう。

どっちが美味しい？机の下で食べるのも面白いし美味しいかもしれないねえ。

でもいつも何時も机の下で食べるのはどう？ちょっと犬みたいねえ。

もしこれがパンでなくてとっても美味しいケーキだったら机の下におちたのも食べる？ 等々話し合ってみましょう。

#### <高学年>

イエスさまは「子どもたちのパンを取って子犬にやってはいけない」と言われました。

いつもイエスさまは優しいと思っていたけどなんだか意地悪みたいですね。

子どもたち、って誰の事でしょう。子犬って誰の事でしょう。話し合ってみましょう。

★今週の聖句

『エッフアタ』と言われた。これは『開け』という意味である  
マルコによる福音書7章34節

★ねらい

心の耳、信仰の耳が開かれるという展開の中で、この物語を、自分のこととして受け止めることが、今回のねらいです。

★説教作成のヒント

言葉はなくても、心が通じ合った、というような体験をお持ちの方は、そのご自身の体験、エピソードなどをお語りくださってもよいと思います。また、人間関係ということだけでなく、神さまの御言葉が、こんなときに、自分の心に飛び込んできた、ジワッと伝わってきた、といった経験も、子どもたちに伝わると思います。その時、きっと神様は、「エッフアタ」と言っておられたはずですから。

★豆知識

「エッフアタ」というところだけ、突然、イエスさまの肉声が聞こえるような言葉です。当時、お使いだったアラム語です。基本的には、わたしたちの使う今の言葉に訳されて行くのが聖書ですが、このようにその時のイエスさまの肉声を書き残されているのは、その言葉が、当時の人々にとって深く刻まれていたからだと思います。ひょっとしたら、色々な場面で、実際に用いられていたのかもしれませんが。考えてみると、わたしたちの信仰生活でも、アーメン(然り)は翻訳されずに、そのまま用いています。ハレルヤ(主を賛美せよ)も同じです。当時の人々と同じ言葉を使うことで、その時の様子を、生き生きと思い起こすことができます。こういうイエスさまの肉声、ほかにも思い出せますか。

★説教

あるとき、二人の女の子が仲良くなりました。ふたりは、2歳と3歳の女の子。まだそんなにじょうずにお話できません。それだけではありません。その二人、ひとりは日本人で、もうひとりはフィンランド人。お互い、言葉が分かりません。でも、ふたりは、顔を見て、にっこり笑って、仲良くなって、手をつないだり、踊ったりして、楽しそうに過ごしていました。

その子供たち二人の姿を見ながら、わたしは、初めて会った人、それも、言葉もわからない人と、あんなに仲良くなれるかなあ、わたしだったら難しいだろうな、と思いました。わたしは、(自分の耳を触って)この耳は、聞こえます。音楽を聴いたり、鳥の声を聴いたり、みんなの声を聴いたりすることができます。でも、相手の人が、知らない国の言葉を話したりしたら、一所懸命聞こうとしても、何もわかりません。そういうとき、(自分の耳を触って)この耳は、あんまり役に立っていないようです。

(自分の耳を触って)耳の聞こえない方が世の中にはいらっしゃいます。音楽も聞こえないし、鳥の声も聞こえないし、みんなのおしゃべりも聞こえない方が世の中には、いらっしゃいます。耳の聞こえない方は、よく手話と言って手や表情をいっぱい使ってお話をします。そういう、耳の聞こえない方と出会った時も、(自分の耳を触って)この耳は、あんまり役に立っていないようです。

だから、耳の聞こえない方と出会った時とか、言葉の分からない外国の人などと出会った時、私たちは、「どうせお話することができないから」と思って、あんまりちゃんと顔を見ることもしないし、お友だちになろうとしないことが多いと思います。本当は、あの小さな二人の女の子のように、だれとでも、仲良くなれるといいですよ。

さて、あるところに、耳が聞こえず、言葉をあまり話すことのできない人がいました。きっと周りの多くの人、その人とお友だちになれなかったのではないかなと思います。でも、イエスさまは、その人と二人きりに

なって、顔と顔を向き合わせて、その人のお顔をよく見て、その人の目をしっかり見つめて、「エッフアタ」とおっしゃいました。エッフアタというのは、「開け」という意味の言葉です。そうしたら、その人は聞こえるようになり、言葉も話せるようになりました。

わたしは思うのです。この人は、この時、イエスさまによって耳が聞こえるようになり、話もできるようになりました。それは、とっても嬉しいことだったと思います。でも、言葉の分からない外国の人と出会ったり、耳の聞こえない方と出会った時、この人も、お話ができなくなるかもしれません。イエスさまは、「エッフアタ 開け」とおっしゃいました。これは何を意味していたのでしょうか。そこには、ふたつの意味があったと思います。

ひとつは、(自分の耳を触って)この耳が聞こえるようになることだけではなくて、いろいろな人と心を開いて、過ごせるようになることです。言葉が通じなくても、その人を大切に作る心、同じ神さまの子供、神様の家族と思って、その人のことを大切に作る心。その心を開いてくださったと思います。そして、そしてもうひとつは、(胸のあたりを触って)心の耳を開いて、神さまのお言葉をしっかり聴けるようになることだったと思います。「ふん、聖書の言葉なんて、うそだ」なんて言って、わたしたちの心の耳は、ときどき、聞こえなくなってしまうことがあります。(胸のあたりを触って)心の耳を開いて、(聖書をしっかり持ち)わたしたちが神さまのお言葉を、しっかり聴けるように、祈りたいと思います。

#### ★分級への展開

○さんびしよう

\*讚美歌は”こどもさんびか”(日キ版)より

123番「かなしいときにも」

改訂版133番「歩こうみんなともに」

○はなしてみよう

33節の「両耳」と言うときの単語は、体の器官としての耳ですが、35節の「耳」は、「聞こえること」といった意味の別の単語が使われています。確かに、耳が聞こえるようになった癒しのみわざの話ですが、「聞こえること」「聞こえないでいること」とは何だろう、と考えさせられるところです。実際、私たち、聴力があっても、同じ話を聴いていても、違うように聞いたり、右から入って左へ抜けて行くこともありますからね。

同じく、35節の「舌のもつれ」と訳された単語は、「舌が縛られていること」「舌の拘束」といった感じです。しゃべることはできても、しゃべれないことがあります。本当は言いたいのに、言えないことがあります。「わたしは神様を信じています」と素直に言えないこともあります。「わたしは教会に通っています」と言えないこともあります。「そういうこと、やめようよ」と勇気を持って言えないこともあります。何が、「舌の拘束」になっているのでしょうか。そして、その「舌の拘束」を解いてくださるイエスさまのみわざとは。

○やってみよう

カチカチと音のする時計を持って来る。

自分の耳に指を入れて時計の音が聞こえるか聞こえないか試してみる。

二つのチームに別れて片方のチームはみんな耳に指を入れて聞こえない様にする。

別のチームが声を出さないで大きな口をあけてみんな「イエスさま」とか「せいしょ」とか好きな言葉を言って当ててもらおう。出来たら交替する。

耳の聞こえない人、聞こえにくい人はどんな時に困るか想像して話し合う。

<高学年>

昔は体の不自由な人は(耳でも目でも手足でも)みんなから差別されていたことを学ぶ。

イエスさまは差別されている人や弱い人も神様から選ばれた大切な一人であることを色々な時に私たちに教えて下さいました。聖書の中でどんなお話があったかおもいだしてみましよう。

★今週の聖句

「わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」  
マルコ福音書8:34

★ねらい

聖書の御言葉は、時として、「道徳的な教え」のように受け取られることがあります。私たちも、もったいことをしましょうね、といった具合に。でも、そういう領域でははかることができないことを、今日の個所のようなところは、示していると思います。自分を捨て、自分の十字架を背負って、という語り口も、さあ、私たちも頑張ろうね、というメッセージへとつなげることももちろんできるでしょうが、ここでは、自分を捨て、十字架を背負って行かれたまことの神の子、救い主を仰ぎ見ることを考えました。語るべきは、「道徳的な教え」ではなく、「福音」ですから。

★説教作成のヒント

出だしのところの洗礼者ヨハネ、エリヤ、預言者の一人、といったところを、直接語ろうとすると、その説明に追われることが起こります。あまり説明が長くなると、話の核が見えづらくなることがあるので、そこところは子供に伝わりやすく置き換えるのもひとつの手であろうと思います。ここでは、すごい人、超能力者といった表現を使ってみました。

あとの方のペトロの「いさめた」話も、ここでは、「変な話」をしないでください、と言った表現を使ってみました。「悪い話」「いやな話」「聞きたくない話」・・・などの工夫もできるかもしれません。

★豆知識

創世記で、食べてはならない木の実を食べたアダムとエバに、「どこにいるのか」と神さまがお尋ねになる場面があります。神さまは本当にどこにいるのかわからないのではありません。お尋ねになり、答えさせることを通して、アダムやエバが自分のしたことを見つめるように導かれたと思われれます。ここでも、人々は何者だと言っているか、とお尋ねになるからと言って、本当にイエスはそのことを知らなくて尋ねているのではなく、尋ねて、答えさせることを通して、弟子たちに、大切なことを教え導こうとされています。ここからいよいよイエスのエルサレムへの旅(十字架への旅)が始まって行くからです。

★説教

病気を治してくださるイエスさま。悪霊を追い出してくださるイエスさま。いろいろなたとえ話をして、神さまのことはお話してくださるイエスさま。目の見えない人を見えるようにしてくださるイエスさま。死んだ人をよみがえらせてくださるイエスさま。・・・そんなイエスさまを見て、みんな、どう思っていたのでしょうか。ある人は、「なんだかすごい人だね」「きっと超能力者だよ」と言ったかもしれません。「昔の偉い人が生き返ったんだよ」と言った人もいたようです。

イエスさまは、お弟子さんたちに「あなたたちは、わたしのこと、どう思いますか」とお尋ねになりました。お弟子さんのひとり、ペトロさんは、「あなたは、メシアです。」とお答えしました。それは、周りの人が考えているような、「すごい人」ということではなくて、「イエスさま、あなたはただのすごいひとではありません。あなたは神の子、みんなをお救いになる救い主です。」という意味でした。さすが、お弟子さんの答えは違いますね。

これをお聞きになると、イエスさまは、「救い主は、苦しみを受けることになっています。長老、祭司長、律法学者などから、苦しみを受けて、十字架につけられて、殺されるのです。そして、三日後によみがえります。」と。それを聞くと、ペトロさん、今度は、「イエスさま、そんな変な話はおやめください」と言いました。でも、今度は、ペトロさん、イエスさまから叱られます。救い主であるイエスさまが、苦しい思いをなさること、十字架につけられること、それは、悲しくて、辛い話だけど、変なことではない。とても大切なことなのだよ、と。

お弟子さんたちも、イエスさまのこと、えらい人とか、超能力者のように、考えていました。どんな問題があっても、すぐに助けてくれる、スーパーマンみたいなイエスさま、それが救い主、メシアだと思っていました。でも、そうではありません。イエスさまは、超能力者やスーパーマンみたいに、まるで魔法で助けるようなことはなさいません。人を救う、人を助ける、ということは、自分自身、苦しんで、痛みを負って、命をかけること。わたしも、そうやって、命をかけて、あなたたちを救うのだよ、と教えられたのです。そういうイエスさまのお弟子さんとして、あなたたちも、周りの人のために、必死になって、取り組む人になりなさい。自分ばかりいい思いをしようと思わず、人の幸せのために、自分が痛みを負えるような人になりなさい。そういう思いを込めて、「わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。」とお語りになりました。

お弟子さんたちは、その言葉の意味が初めは分かりませんでした。また、意味が分かった後もそう簡単に、「だれかの幸せのために、自分がつらい思いをする」ということができるわけではないと思いました。でも、そのたびに、十字架にかかって、わたしたちのために、代わりに死んでくださったイエスさまを思い出しました。イエスさまは、超能力者のように、魔法のように、あなたをお救いになるものではありません。イエスさまは、あなたを救うために、十字架につけられて、あなたの身代わりになって死んでくださった、まことの救い主、メシアなのです。

#### ★分級への展開

○さんびしよう

\*讃美歌は”こどもさんびか”(日キ版)より

127番「イエスさまのじゅうじかを」

改訂版84番「イエスさまのじゅうじかを」

○はなしてみよう

「クリスマスは何の日?」「イエスさまの誕生日」という問答は、正しいと言えば、正しいのですが、でも、もっと大切な問いは、「では、クリスマスは、あなたにとって、どんな意味がある日ですか」という問いであり、これを考えることがより意味のあることだと思います。

「あなたにとってイエスさまは何者ですか?」「メシアです」というのも、算数の質問と答えのようなものです。でも質問と答えの間の「式」が抜け落ちています。子どもたち、そして、教師たち、ひとりひとり、「あなたにとって、イエスさまはどんなお方?」「わたしにとって、イエスさまは……です。」ということ、証し合ってみましょう。素敵な証し会が行われるはずですよ。

○やってみよう

☆小枝で十字架を作ろう

小枝を拾って組み合わせボンドと麻ひもなどで、固定して十字架を作りましょう。

縦の一本は神さまと私たちをつなぎ、横の一本はわたしたち一人ひとりをお互い隣り人としてつなぎます。どちらもその真ん中にはイエスさまがいてくださることを覚え、感謝のおいのりをしましょう。

★今週の聖句

「いちばん先になりたい者は、すべての人の後になり、すべての人に仕える者になりなさい」  
マルコ福音書9章35節

★ねらい

「すべての人に仕える」というみことばに関して、みんな大切な人、というところに絞りました。「だれがいちばん・・・」という会話を取り上げる時、受け取りようによっては、競争自体がいけないことといった極論に走ることも時折見かけるので、そのところは気を付けたつもりです。

★説教作成のヒント

弟子たちの姿は、滑稽に思えることもあります。でも、自分の中にある願望をよく見つめてみると、この弟子の姿を通して、自分の姿が映し出されます。そうやって映し出してもらわないと、私たちも、自分の願望、自分の本音が見えずに、「わたしはけっこう、謙虚で、誠実」くらいに勘違いするところがあります。弟子たちも、自分たちが見えていませんでした。わたしたちもそうです。その自分をよく見つめて、説教に取り組むべきでしょう。

★豆知識

33節に「家に着いてから」とあります。家とは、だれの家でしょうか。カファルナウムの家は、シモン・ペトロとアンデレの家と思われます。(→マルコ1章21-34節参照)

35節「イエスが座り」慌てず、じっくりと、神の国について語られる主イエスは、座ってお語りになります。マタイ福音書5章はじめ、ルカによる福音書5章3節、ヨハネによる福音書8章2節など参照してください。

★説教

かけこの練習を一所懸命がんばって、運動会で、一等になる。すごいことです。部活での練習を一所懸命やって、勝利を目指す。とっても素敵なことです。勉強をがんばって、テストでいい点数をとる。誰にでも、できることではありません。これも、すごいことです。絵の上手な人もいるでしょう。描いた絵が、入選した。これも、まねのできないこと。先生は絵が下手だったから、どんなにがんばっても真似できません。音楽の好きな人もいますね。歌がうまい人、楽器を上手に演奏する人。それで、コンテストで優勝した、とか。みなさんの中にも、何かでいちばんになったことのある人がいるかもしれません。それは、すごいことですし、努力をできる人もすごいことです。

さて、お弟子さんたちは、ある日、話し合っていました。それは、「だれがいちばん偉いか」ということでした。スポーツや勉強、芸術など、だれがいちばん上手にできるか、ということではありません。だれがいちばん頑張り屋さんか、ということでもありません。「だれがいちばん偉いか」ということ。神様は、わたしたちみんなを愛しておられます。誰かだけ、特別に偉いとか、誰かのことだけ、特別に愛しておられるということはありません。どんなに目立つ人のことも、どんなに目立たない人のことも、神様は、同じように愛しておられます。同じように、見守っておられます。お弟子さんたちは、そのことを忘れて、「だれがいちばん偉いか」と話し合っていました。

そこで、イエスさまは、小さな子供を抱き上げて、「みてごらん、この小さな子供。まだ何もできない。まだあまりたくさんことも知らない。でも、神様は、同じように愛していらっしゃるよ。あなたたちも、だれが偉いとか、ではなくて、ひとりひとり、みんな大切だということ、思い出さない」とおっしゃいました。私たちは、すぐ、「だれがいちばん勉強できるかな」「だれがいちばんスポーツできるかな、あの人かな。あの人はずいいな」とすぐに、「だれがいちばん・・・」と考えてしまいます。でも、イエスさまは、「どこに偉い人がいるかな」といって偉い人をお探しになったことは一度もありません。どっちかと言うと、あまり目立たな

い人、病気だったり、体のどこかが不自由で困っていたり、そういう人のところへ行って、「大丈夫。あなたも神さまの子供だよ」と助けておられました。

お弟子さんたちにも、そのことを分かってほしかったのでしょ。偉い人になりたいのかい。それよりも、目立たない人、困っている人、助けが欲しい人のそばに行つてごらん」と言われました。それが、「いちばん先になりたい者は、すべての人の後になり、すべての人に仕える者になりなさい」というみことばです。偉い人ではなくて、みんなが《大切な人》ということ、イエスさまは教えてくださったのです。

### ★分級への展開

#### ○さんびしよう

\*讃美歌は”こどもさんびか”(日キ版)より

48番「こどもをまねく」

改訂版5番「こどもをまねく」

#### ○はなしてみよう

マルコ福音書を見ると、三度の「受難予告」が記されています。一度目は8章31節から、二度目は、今日のところ、そして、三度目は10章32節から。受難予告においては、いつも「弟子たちの無理解」がクローズアップされます。一度目は、「そんなことがあつてはなりません」といさめたペトロがいさめられる話。二度目の今回も、それを聞きながら、「だれがいちばん偉いか」と語り合う姿。そして、三度目のところでは、ヤコブとヨハネが「わたしたち二人を一人は右に、ひとは左に」座らせてと、イエスさまに自分たちの栄誉を願い出る姿です。

笑うことはできません。わたしたちも自分の心の中をのぞくと、やっぱりいい思いをしたい、自分だけは上手くいきたい、もっと認められたい、成功したい、・・・と願望を持っています。そういうお弟子たちをお見捨てになることなく、エルサレムへ歩まれたイエスさまのお姿、改めて振り返ってみましょう。

#### ○やってみよう

☆「一番の者が後ろになる」じゃんけんゲーム

はじめはひとりずつスタートして歌いながら辺りを移動し、歌が終わったところで近くのとじゃんけんをします。一般的には負けたら勝ったひとの後ろに付きますが、ここでは負けたひとが先頭になり、最後に一本の電車になるまでじゃんけんを繰り返します。

歌は「じゃんけん電車」、「貨物れっしゃ」などがあります。「線路はつづくよどこまでも」も良いでしょう。大人も入つて、できるだけたくさんで遊ぶと楽しいと思います。一番先頭になるのは誰でしょう？